

# 読書

■ 集合住宅と日本人 新たな「共同性」を求めて 竹井 隆人〔著〕

## 他者を意識した緊張感ある共同体を

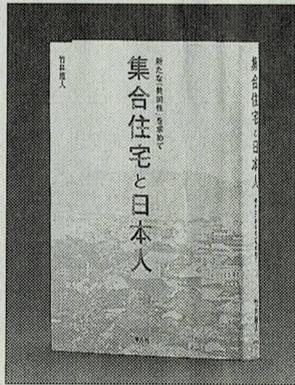
評・北田 暁大 (東京大学准教授)

かなり論争的な本だ。タイ  
トルを見ると、集合住宅にお  
けるコミュニティや共同的  
なまちづくりの重要性が、生  
温かい理想主義的な雰囲気  
を伴いながら描かれているの  
ではないか、と私たちは考えて  
しまう。しかしこの本は、私  
たちが何となく「善きもの」  
と前提しているような「コミ  
ュニティー」や「まちづく  
り」のイメージに違和感を決然  
と表明する。

たとえば、住民たちの交流  
を推進するコミュニティの  
構築について。著者はその重  
要性を一定程度認めつつも、  
それが多くの場合曖昧な形  
で語られ「はなはだ情念的で表  
面的な意味合いでの人間同士  
のつきあい」として捉えられ  
ているのではないかと論じ  
る。コミュニティをめぐる  
言論空間のなかで、住民の主  
体的な政治参加の契機が見失  
われつつあるのではないかと、  
というのだ。では、住民の  
自主性が前面化しているよう  
に見える住民運動はどうか。  
これについても「すべて  
の」というわけではないだろ  
うが――「住民運動に透けて

見えるのは、自分たちの住宅  
を既得権とし、それ以後に建  
設される住宅のみに規制をか  
けるべきだという身勝手さ、  
あるいは……無責任さであ  
ろう」と手厳しい。著者が目指  
す「新たな共同性」は、表面  
的な相互交流でも他律的なま  
ちづくりでもなく、住民によ  
る主体的な政治的共同性の構  
築――ガバナンスを体現した意  
味空間において立ち現れてく  
る。それは内輪的なつながり  
を超え、他者が自らとは異な  
った存在であるということ  
前提とした緊張感溢れるもの  
となるだろう。

しばしば異質な他者との出  
会いを阻むものとして批判さ  
れるゲーテッド・コミュニティ  
(防犯のため構築された  
閉鎖空間)についても著者独  
自の分析が加えられており、  
監視社会論に対する問題提起  
として受け止めることもでき  
る。評者は著者の「日本人」  
をめぐる文化論的考察のすべ  
てに同意するものではない  
が、都市や住居空間の共同性  
の持つ複雑性について多くの  
理論的示唆を受け取った。論  
争を喚起する刺激的な本であ  
ることに間違いはない。



平凡社・2940円  
／たけい・たかひと  
68年生まれ。著書に  
『集合住宅デモクラシ  
ー』など。

## ■ ネットカフェ難民 ↓

ネットカフェ難民には月  
最低9万円が必要で、その  
うち6万円が宿泊代と知っ  
て、思わず首を傾げた。わ  
ずか1畳の空間に

1泊2千円かかる

が、作中では美しくも魅  
力的に描かれている。二人の  
退廃的な愛は、バブル崩壊  
後の不景気、そして拡大す  
る所得格差によって日本人  
の常識や倫理観が激変した

文芸春秋・1550円